

漁魚書日載

二十七

大正三年十一月上院起筆

特別
14
1919
276



斐田系の概

大正三年十一月廿三日記

の内各文庫の開放、つきは毎月前首^首お初
 三々三々所ある時を月人七根強しと述^述者
 を出し、そのことを前書に記し、互々うめ
 念、開放を内決し、ゆるゆる其の事端とん
 果、涼を名とし、跡者の居宛を促し、完ぬ
 お不内別、仍て非なり、故別するんが解^解統の
 きの目録、さか母とす、印刷し、解^解統の
 七大体、おひそろ、似し、関読、体と刻、念、
 統、澄ろ、す、と、知、考、史、十、三、印、洋、考、七、五、印

洋書六七部は出陣しあつたが、あつた二
 おもしろく感し、之を七十年前桂枝
 つのりゆし、いづる傳子とつらて合座
 内、あつて二三を記し、ことあると、あつて多く
 とつて、このあつた、いづるあつた、いづるあつた、
 中、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 府、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 へきあつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 七記し、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 のあつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 とつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 也、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、

和洋方より、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 をあつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 ハあつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 とあつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 内、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 了

○本組鑑

三十三冊

近載り、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、
 里、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、

ハ前年一見せしことあり、評ふに記す
と云ふを以て此考と編年録と題し後
に本朝通鑑と改題し之を以て頒布
の目録あり

○史記目録

十八冊

寛文四年より同十年に亘つ七十年間
林恕等の編輯の志存する

○本紀論略

安積元著

二冊

大りし史の論略と著る自に
筆にふる

○徳川氏御實紀

五百五冊

家康より徳川迄に亘る十代方の文
御事より御入りの主派する

○史文

十三冊

寛政十一年止未六月二十日迄三平
を以て幕府の進献の自を本を
進献と題し正書し之を以て
見せしむ此言本紙の楯心に據
徳わりの刻字あり

○新井君美自を本教行

朝鮮仕方の式に關する事、
聘禮

二國するもの四書後集紀多、記
紫華下活木の朝辭、其するもの
外伯軍宣下三十一ヶ方の儀不同の
河中、癸巳三月野城をとちち
○和宮様御時御用御入内帳八冊
原書ありし程々、嫁又道具の各々
代價を洋記しあり

○異朝万の物語

一冊

井野の政文より怒自草と急一巻
しもの

○朽木家古又考 十三冊三十八軸九通
近江朽木の八枝信、関了女又考を
赤衣の朱印まじ

○西洋紀少

三冊

お井尾美自筆本也

○諸国心方

二十冊

松平貞信よりし枝本、おん如也
各本所在の如く、幕府多記、永享
院、余も時方せし見しもの

○唐物類考

千五十四巻
言本

四万六十五冊

福生養舟の大著と云ふことよりあらわし
此本加賀二高の献本と云えし

○ 封曲

一巻

以印崎士つとあるもの目録の解読
云々延慶二年程因定寺より所
して文永中程心堂の侍本より
るを泉州坂本村の禪寂寺の
龍心庵より其末、延慶二年己
酉八月十二日蓋々抄けりて跋
因定の押印あり蓋河五丁印
校字ありと考ふる、進上りともあり



○ 束袖

二十一冊

嘉永九年井白石自筆、女権元吉直
治の序あり

○ 花月草紙

四冊

嘉永九年未定は自筆

洋書の部より未刊跡ありて出遊てん
より款のことと云ふと昔の巻を新巻を
木村の巻ありし日録外、此本を大本系
大比在本地外、其巻の末の巻を
多き、其目を巻けり、其末の巻を
そのを別巻なり

一	一考考	十一冊
一	三國志評節	二冊
一	東萊詩集	六冊
一	笑江詩淵の集	四冊
一	伐檀集	二冊
一	梅窓四六控半	十九冊
一	漢隸字源	四冊
一	銀宋重校廣韻	五冊
一	東坡集	五冊
一	杜工部草堂詩集	十冊
一	元抄七七八控抄改とんりう... 二考考を 修了	二考考を

佐の海考

字の母

四十冊

此考は花陰四十年刊し、新設原照
 大典の漢訳を駁正するの意を以
 て著し、そのうらを以て物
 候罷との故本を幾重に改出
 考をを考とんりうの也

江洲集 十六卷の内欠十三卷 北四冊

宋の原起換

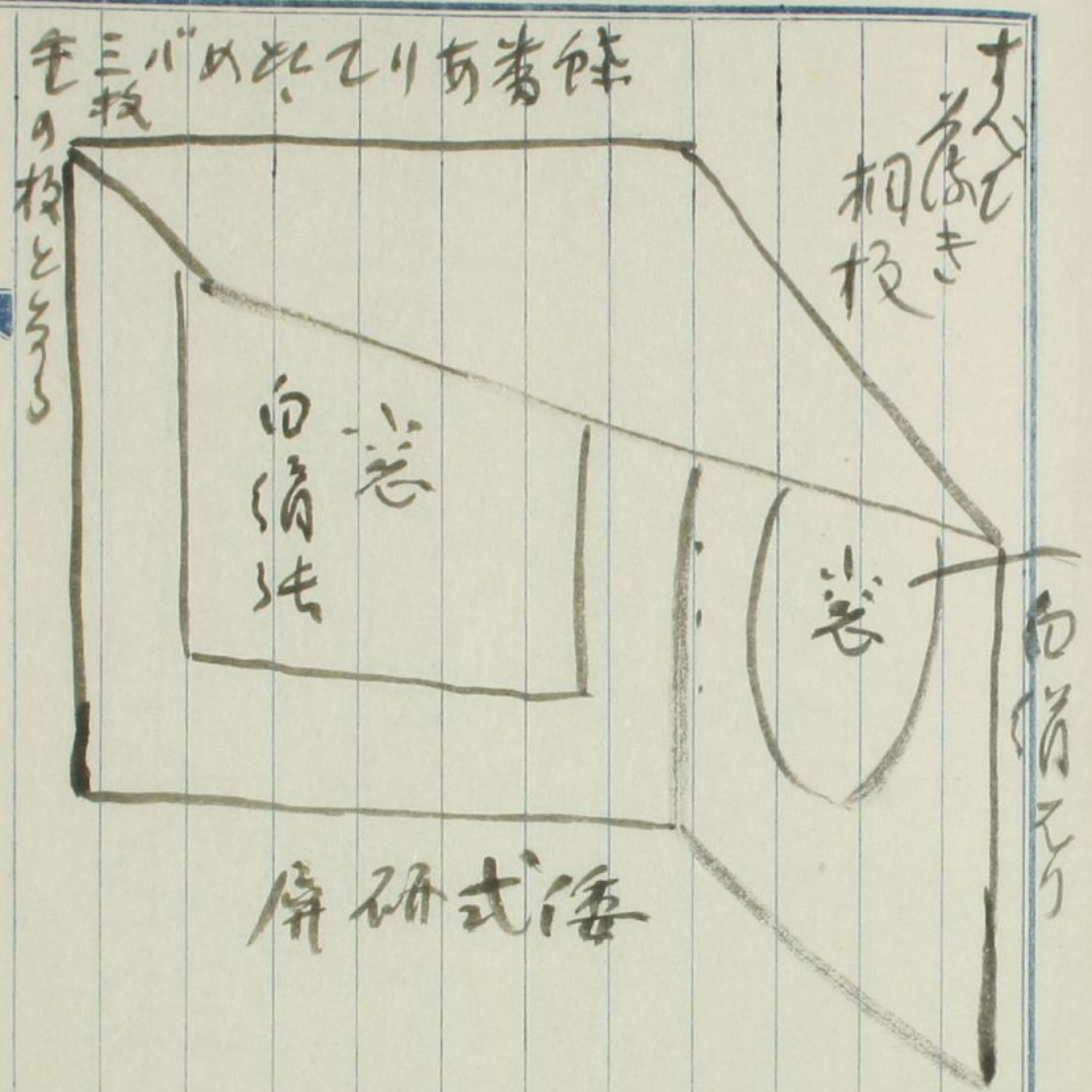
流奎律籠、江洲依家守初を心
 リての二年お東海遠を刺リ、

そのひらきしらすし起書と此の物に校せ
ん江洲集の版本と誤りん且士
大夫のゆを必ることを持てえんし
通延死して故其其を解さるん
ハ瀛奎律譜が載るる所を瀬
くもえんハ或は起の意をいふ
くても

昆陰四庫全書無校本四〇七二七六冊
清の乾隆四庫全書中の校本と
ころころとあるを蒐集しなるものな
ころ二十五卷の昔ももろろ

北書の外、支那の書も我邦に在る。正平、海防
長年古流書の如き多く出せあり。場らしくハ皇
政書(五冊)本(二印)の存あり。一也也
出しり。てり。こと又る。手記。支那
の古版用い。の。度。奥。四。七。出。版
し。り。り。

洋書部類も古版本を稀観のりとの
ころころ多く出せり。殊に余の書を
めり。外。四。の。法。令。全。集。の。如。し。ハ。ボ。ル。ト
の。著。者。の。如。き。余。の。如。く。も。著。者。の。如。く。就
し。る。如。き。本。ハ。ハ。ル。マ。ウ。の。如。き。其。他
の。文。具。の。如。き。も。あ。り。し。



此種の研厚
とせしめ
とせしめ
さんとう
の一寸
二方研を
いふと
す上り
あん心
塵埃を
くす
研厚

何れも同じと曰く、縷丸や丸や
 ちんちんの苦心と一とくとも
 う西果や致果やを代りて
 るとて中々時代も終りの
 らる苦心しとくとも似たり
 らる此れ一と平均二十四の
 とおとせしめ縷丸の鏡も保
 一鏡二十四とおとせしめ
 三つらん終りのにせしめ
 一と遊玩味も保し人の多
 く保も保れ同じきとす也

上より二方二言あるを母由の晴らきしを
知くさう紙傳式の破しと此しあさう
とす油和をす(十一月廿五日平山むく松を
贈る)

○木打桑市のふさいふさうを大抵天目
奉り破し紙傳偏の代名のこくアしきるを
贈る。紙傳えしく土中入るさうは
かた紙物とるえし〜あるゆ分のかぶり
と土もい海文を毛と笑ふ紙のあくり
ん〜にあり末校とく改元すはあ
んも余るうに此名を贈るさうあるは
んを以し初めさう 十一月廿五日

○世の事と物佐や商人之義 田記之義
をいそさう。さあちを個人之義 田記之義
義七一〜七二のさう混純利尾一とる
とるを得さうことを論するさう末の大
後記のせん〜の従年 改元流論は叙
し語を引きて個人之義と大節の
ちけいの家義細節のさう個人之義
云々此語論し〜とる。味明のさう
○朝野のさう〜のさう。味明のさう
般回者領地と語法を破み〜さう
ちのさうのさうのさう。其のゆ分
さう〜のさう〜のさう。其のゆ分

朝野のさう〜のさう。味明のさう
般回者領地と語法を破み〜さう
ちのさうのさうのさう。其のゆ分
さう〜のさう〜のさう。其のゆ分

朝鮮本よりゆいんをなす方体とすむ衛文人
言ひ支那の明初幼の友撰本の言を模
倣し此の初より支那の書其故を遷る
ちよりの朝鮮も移るを之を抄録し此
く道元此書も此言を用ひてなる者朝鮮
と大流のつらふと趙子の印の古の流を
流すといひもはるなり此古體をゆいん
安平本 韓構本 云々云々ありとの
所及この古體であるらん院書と云
ふりの録流の言言を用ひる古體は官
本の外題をいふ朝鮮獨得の力あり

丸のちる字のうらなをいひてはる刻本の版
かして此言の適合用なりとす
朝鮮も移るなりとす早く鑄造し此
と云はるも支那の早く鑄造し此
である、朝鮮流言の記えに記しを
の流もあつた漢文倫大なりとす
朝鮮も移るなりとす本全報文集
の中より古文詳定禮の鑄字版が西
暦一二三の年印出せらるるを系
明文を考へける在るなり十三世紀の初
めより四半 朝廷の重要なる本の流
言の印出せらるることと記す

其初の用おん比の十二世紀中頃の
とさつをうん支るの即ち西暦一〇〇〇の
あり以てんハ二五十年七前心支那の王
横り錫ひ法字を心の心成印の終る
とあるゆ代、較めんハる年七前心成

朝鮮本の一大物をもと紙のよりきこし
大なることとある、皆る楮の皮ひあし
とさつ一枚の大きさを去廿ハ二尺七寸
ありさが一尺七寸、昔おとさつを
えと半裁し紙の紙の紙の大別
三粒ひ、一葉よ紙と壯紙とさつ原

く且つ望寐の楮のしそをうあ、どう
注し紙の一粒の加えとて并盤
心おつ比楮をののうらう一寸さりのの
楮へえくる、えとさつを紙の紙の
印刷のうらうとさつをののの紙と
とさつ、ま下等紙をさつとさつ
一尺の楮の紙をさつをのの紙の紙
さつをのの紙をさつをのの紙の紙
楮をのの紙をさつをのの紙の紙
皮ひさつ

朝鮮本の表紙のをもと黄白のちの三
粒ひ黄白の葉をさつをのの紙の紙

ま佛者に取らんことを積むあり、下心を表
紙と書物紙と日替の紙と式取七言
めを翻む紙つとてあるが上代し例
として取取を用ひてする、えんをこいし
こんことをあつたのるまのるまを
出さる事と雨子うもあつた年
の故本のあつた年月の記の中七起及
びつと積む便和にあり、綴紙七言
の記の中つと神和を用ひる
上代し一書しとて乃ち白紙の
紙と書物紙と書物紙の書物紙
如紙を固めしとて例とす

辨持ある一統の装祓法、綴紙と系
うあつて或る代に積むるや知方
の極りし大印する本をなめし
ん、装本、綴紙の記を全部綴紙
被せしむるは、併し書物日
うかりつと綴紙に取取を改
装しは、この記紙に取取を
とるを行つて

の夏那の書物やその書物を辨つて
の麻の書物のある上代し朱摺
田形の印の積むるあるは、誰の

うの目く維新の年洋紙を求めたといふは終りに
 和紙を打つた代りにと倒してとコンクリート
 を掛してあつたといふは、その四角の中の一と概
 類蘇や竹や風や文昌帝やいろいろのいふの
 掃うんちあつて、一寸もくると今の高家の高
 標ひもあつたといふは、つゆ論維新前後を
 一と高標を用ひた例も無いといふも、又海
 軍省のことときハイカラ先をと特ニ蘇を
 打破する意味で地球儀の洋人海軍の
 図をとり考へ張り高標に似た塩梅、扉の
 上部に附して古物をも存したといふもあつた
 全体こんとあつたといふも、又所の考へ試し

洲源のいふは古物をも本を考へる目的は
 顧客のいふは受験者の前を視る考へる
 味をいふはコンクリートのついでに、一考へる
 といふの意、歴史的に其の考へる首を考へる
 尾の筋白の大小の山形を考へる
 魁星像を描いたといふは、この魁星像
 と考へる考へる、右の手は筆を握り、左の手は
 鏡を執り、右の足は踏む、左の足を踏む、
 左の手を斗を後方に踏む、状を四
 上印の目く三ツ或を七ツ、四つあるといふ
 例といふといふ、即ち魁星の考へる考へる
 筆の目く、鏡、杖、筆、新筆、新筆と

上杉山々今少しを接しし一石は城を少しと杉山
の邊に所在の石

福正の人を破るる人 杉川の南流に下す
傳あり其の關係を之を南流に下す
の某を破るる事なしと云ふ所は破
の北流に下す一石を川の保と伝
すことなる川田家と云ふ事
を傳ふしといふ事あり 破るる人
たる事先此の事ありと傳ふ
事ありしとも此の一事を
傳ふしと云ふ事ありしとも
此の事ありしとも此の事ありしとも
此の事ありしとも此の事ありしとも

松うまはるる事なしと云ふ事ありしとも
ついでに所はるる事なしと云ふ事ありしとも
上流の河の事ありしとも此の事ありしとも
二 随地を去るる事ありしとも此の事ありしとも
りし

此方の依り木家ありしとも杉山と
傳ふ事ありしとも此の事ありしとも
又云ふ事ありしとも此の事ありしとも
(十一月甲子日)

○川流聖漢を其の南流と云ふ事ありしとも
其の事ありしとも此の事ありしとも
其の事ありしとも此の事ありしとも
其の事ありしとも此の事ありしとも
其の事ありしとも此の事ありしとも
其の事ありしとも此の事ありしとも

じ余の事業を辭せり一人のあり北人跡を
行ずん登つれ勿論詞をさういふうん
を格式の上より正しむをぬぬ、跡を在り
聖漢の格式の物なむある漢を経緯の
みまふ所よりを述べれ、ことを誰れも
こころも、而も得んをば使ひまひ、且
あつてころころ、其のこころありて
のめむと林路果るを、そのまむある
つ聖漢をこころも、そのまむある
物なむと跡を果るも、跡を果るも、
いふのありと人おんある得ん者、
う、つ、と、新、行、む、又、人、と、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、

は、つ、世、つ、と、青、命、中、姓、
を、と、と、と、と、と、と、と、と、
二、三、寸、計、り、の、物、中、聖、漢、
此、物、の、又、な、と、あ、る、又、人、
く、と、と、と、と、と、と、と、と、
と、と、と、と、と、と、と、と、
れ、と、と、と、と、と、と、と、と、
和、と、と、と、と、と、と、と、と、
〇、此、物、の、聖、漢、人、と、あ、る、
と、と、と、と、と、と、と、と、
割、と、と、と、と、と、と、と、と、
し、い、め、め、え、ん、が、と、え、ん、

元日に供へるものこと略す
 日本古記の板木を何んか焼ひ海
 たるよりいへば此の如く行す
 日本紀とまが元本(桑名子本)と
 紀中の白の句をいへば
 〇天原の行ハハと燧を言ふ事あるもの
 二箇の内なる燧を方を猪のマツの
 考ふる事此の中へん事ある事此の
 事行らん事併し日本の燧此の如く
 と支那の此等の型を元りたるものと
 思は

從五位下行土佐守源朝臣忠央輯刻

書記卷第一

神代上

日本書紀卷第一
 神代卷第一
 神代上

日本書紀内容見本

丹鶴叢書 辛亥帙

從五位下行土佐守源朝臣忠央輯刻

日本書紀卷第一 カキト フミノノキノツテテ ヒトツ 神代上

古天地未割陰陽不分渾沌如鷄 アメツチ イタロワカレヌメ シラシスアル時ムナカレルフトトリノフノコト

子溟滓而含牙及其清陽者薄靡而 シラケナス名モテ オカニシテモリテクサキヤシラテ シ ミアキシカナルモノハ カヌミ ナヒキテテ 正説也

十鳥文四口



元日... 丹鶴叢書... 辛亥帙... 從五位下行土佐守源朝臣忠央輯刻... 日本書紀卷第一... 古天地未割陰陽不分渾沌如鷄... 子溟滓而含牙及其清陽者薄靡而

○余多々く筆を所す採集家と各程の筆に
及ぶ而していままの玉増る馬車にて及ぶを
し此筆と玩具とて天板にのつる...が余の
えいぬのさる所以也。此筆も此筆よりさるく
板味あり天板三年版本有馬名所巻、名物
人形筆の條を三々

五毛の糸をたて其軸をまうく、つぎ此に小
木板あり筆を平ふるとんか出、納んば
軸のゆゑいふ、是も人形筆といふ、抑
筆のちろこーは江滝といひ、人
五毛の筆をいふも夢見しもう文章
いふもさるく、又此筆とさる

かへしとて又と文章もあつるへしとるんば
けさきも侍ん人の子の為、高きいや
きをわらう、かろくが此筆をたて、圓の
みやげとせん、いふ

あつ入の我とういふもことほつと

人形筆といひのちもあつる、重香

おまけする人形筆のけなはらきは

た、一助の糸のひやつり、以て

世のまじや起上り、法海人形筆、由平

又武玉川二筆

馬車、穀と言ふまゝと、穀を出

又此とさる也

ろ之れを是とす(なり)んもあ入果す
て儀するまやあやもあゆまらんか
惟好まふを提出ししうへし
通あししんすむ以上不説の言も後
に附しし所也

田原の貴族に對しん美作の事を
功者若くは功者の先例を以てし
せらるる日つ法を以て結果を
未年の寸法も格別々として
是の類の言を以て方々して
場合は自命を以てし方と

つる論あるも
高の事
格別
財政上は可
千田と
五る田
の修正も
うへし
提出し
たうと

えんは東洋の物と稱えんを津波の物
と申しんもまづいへば心とて稱するも
そのまづいへんを正す也 亦くまをえん
すを得たり

○「意彩心」の四字古来の標記
もふ、印に刻しむ者前巻に用ひても可
也

○十二月しる 又巻末の巻頭書に
彼方居るものゝ一席上如の英也とせし余も
一席の清涼をのみ 余とて人出峰の北極
清涼に三十年の苦心を積みたることを洋
述す、英人の功を世に傳ふるを責感と

と切めたる回考に關係ある回考 巻末の
折を概しし、まゝに吟聴し、まゝにの微意
こゝろに於て、世に傳ふるを責感とせし
うエケラを後又内容の一端を知らしめん
と切しし、まゝに 清涼のゆゑにまゝに長く
うて、即後のゆゑにまゝにしことさう(休)
此書のすゝめたる元分の意しなるを、まゝに和
英也と評書家の巨匠のまゝに稱する此の
ゆゑに而接する、巻末のまゝに其の
まゝに、清涼のまゝに、まゝに、まゝに
蝶のまゝに、研究しつゝ、まゝに、まゝに、
も彩を徹細の方眼に穿しんたるもの、

古書の内本林あり得るものあり、余の師、就
さして其の或る五十年前の著しものありし、
口微定の古経巻経多き事、尚布す、而して後
篇刊行にてもさるを以て唯比一二部言を
しと存するものなき事、頃者刊行を、題跋に
をよめる者ありて刊行せん、古経巻経流傳
その中元勳の傳り、依りて余も亦一功
するを得たり、昔首微定の題跋序あり

續古経題跋序

余嘗著古経題跋一書、以為考述之一助、
次復巡回諸縣、披素經、伸公卿監諸
寺諸社司卷本、獲觀古経教百廿、其

中偏千歳以上、泥歲月者、及若干卷、一、登
録之以備不忘矣、蓋古経可貴、匪翅校
訂今本之紙繆、至其書法自有隋唐之風
格、可壓倒明清注家之注、惟矣、第憾無
款識者、其書式日支一体、彼此殆難辨、
折故不漫加批評焉、然而此京都、東山泉
涌寺花嶽、峨天皇宸翰法華年、既備後
尾道西園寺花菅公真款、金光明最
勝王經、其絕無董有之、寶笈、不可以
不錄載焉、竟目曰續古経題跋、時明
治十六年九月念七日也

古経書林編後

此書中唐鈔本云云... 此書中唐鈔本云云... 此書中唐鈔本云云... 此書中唐鈔本云云... 此書中唐鈔本云云... 此書中唐鈔本云云... 此書中唐鈔本云云... 此書中唐鈔本云云... 此書中唐鈔本云云... 此書中唐鈔本云云...

福井崇蘭館蔵

玉篇一卷

後言部至幸部

魚山勝林寺舊蔵卷背書金剛曼陀羅記
卷尾有治安元年八月十八日花泉卿本古
之異 康平六年七月廿日於平等院奉書
佛子快林之款

相尾高山寺本に就く之唐僧克花方と云ふ
傳説ありこと左の文に依りしる

相尾高山寺蔵

玉篇卷中廿七 糸部不續字 凡二百六十九字

傳云唐僧克花書

近江石山寺蔵經字至絞字凡十七字

右二卷合為中廿七之全卷首尾具備

久通宮蔵本玉篇中廿二卷ハ敍定此書を
編し了後神宮司廳に傳せしこと又此書
に依り田中伯自業の校正に依りしる
左の如し 改削

神宮司御廳
久通書所藏

玉篇卷才廿二

後山部至品部凡十四部
六万三十一字

延喜四年正月十日收為典藥以定書 押印

在出考本の北月面の注をまゝとて目錄に載せ
りたに條を録す

如意輪陀羅尼經一卷

卷背願師王玉の局才廿七

唐人書
糸部至系部

田中尚も得たる玉の局の書は出考と異なり



玉とありては後述にても福井此の人と云ふことを
初めし初り傳に玉峯の北城の注を後み去
谷川本尾の傳中一木唐京師の遠近福井
丹州にそのひることを載せ収録のの中
出考本録不集の正木あり、仍て出考本録
福井丹州の書と云ふを初り得たり

○五峰の北城の注を海峯考す、其の辛其し
て莫在集ありては人の不集甚し、此の如く余
去年其書在りて同くも収録す、其の七八十均
り以て玉峯の注中、特に專本、送本を区別
し又寫本刊本を令つて細録して其の多之を
りて云ふる、其の專集九十九部、寫本四十五

邦刊本五十四部、送本十数部あり、而して
送本の四五と專集の~~本~~過半、實に五峰
の著見を傳ふ、~~中~~余新選に多し、此の
此紙の法を擬反するもの之れを終り、附し
し書札を傳へんと欲す、而して一部洋字し
て早稲の~~の~~圖書録に備ふとす、
○郷友上野喜久次、出京來訪、懐をも一不
冊子を出し、~~の~~新書、田藩之の花
押十七を模して石版に附したるもの也
藩祖も、今の津に伯の先代に在り、
了く備はるる無し、上野、各代の花
押を採集する、多くの日子を費して

左も、~~の~~此般の書と刻す、~~の~~方多くし、
而して賤ふ能はず、然れども趣味ハ、
大家の考、~~の~~山見し、余在りて其
を~~の~~架中に、~~の~~大正三年十二
月十日記

○次。房宮を~~の~~御のお物、~~の~~五峰、~~の~~示て、
北に~~の~~才六巻を、~~の~~文と事、
中~~の~~雪城、~~の~~念、
の~~の~~と、
卷菱洲の書一時海内に流行し、門下業を交
く、~~の~~其衣鉢を得、~~の~~中、
雪城、~~の~~秋、~~の~~教、~~の~~人、~~の~~雪城、~~の~~取、~~の~~著

いふ雪成成長と満士うして清子の崇徳館にま
ひり方即馬太山田交じ助末村誠一印と才名
を重六、満子弟を同校して江戸におよせし
む三子時る選に満る雪成獨り貴さる憤
然とて曰く方山山田我に兄なる可きも木村
に我に弟とらざる可きなり而して有司憤に我
を念て彼を取らざる法に憤事、非しや然れど
も彼輩業成ふも満子の一教授なる我嘗
に名を天下に揚ぐべしと乃ち江戸に走り
洲の門に入る後果して其言の如し雪成力
人豪爽にして校才あり皆を向峰の一神祠
に祭祀の典を奉ぐ村人相讓して二大憾を也

獻てむと欲し其書を雪成と秋葉とに清く
湖葉を河く秋葉僅に数金雪成則ち
二十金湖葉のよの愕然衆に説く衆曰く湖葉
の貴きを測つて退く江之兒の恥をうと教
に雖も之を贈る祭祀の日村人報して曰
く憾成り清く来り親も秋葉孤節
雙履飄然としてあり祠前に一拜して便
ら去る雪成人則ち舟を柳橋に買ひ岐と
邦河とを載せ鼓笛合奏して祠下に訪
り攝攘三大樽を贈つて曰く薄微の物
聊か盛儀を祝すと村人復に愕然相謂
ふて曰く雪成先生は大家なりと前は其

貪を罵りしもの亦其家を稱す是に於て
聲中忽ち城中に噪き列侯牧伯等あり
執貝を執る門戸の鼎盛市川米尾の後
始めし見る所といふ雪成十年満を云り士
籍に列せしと畏も長常士人を以て自ら余
す其長は如回葉研溝に在り邸宅寛宏
前後街を貫き中に油馬場と冨き殿あり
九の竈に傍つて願所以て自ら雄とせり
揮毫も此定日毎月数日次期に至れば
早起室を拂ひ盃盤を具し柳橋の妓女
名を呼び来り一以て酒を依けし一以
て墨を磨せし一雅に言ふ男子墨を磨

すんかめしき其濃密なること
も欲を煩く玉織を傳めんとしと酒酌
の眞熟すんか則ち妓を以て紙を展べし
の酔腕一揮龍騰り蚪躍り而して其
運毫元のうめく吹刻りて數十家を盡
くす眞に酒氣拂ひ十指間より迸出する
概あり嘗て越の山馬に懸い一日に爪爪二十
五雙を成りといふ其の書に敏且つ捷なる
蓋し天性を請候の書と以て心こ就く
この心之を匣に納れ使番の士禮状を
携く来り例玩球産朱墨一枚を添ふ
雪城直に其朱を用ひて批心し之を還

才當時玩珠朱甚以貴し一枚率於三方銀
二値の故に諸家皆之を利し喜うるを以て
金易ふ唯雪城得るを随ふ之を用ひ
批正畢九の轍を門生に與ふおろく諸方
おふともきを毎に二三日の門生を推めお旅會
に投すんか為るに三室を借る一其起臥
了所一以て春に梅し一以て門生を推
くくお其具必らず精好飲饌必らず
皇美供設強に諸候の女し而して去る
時いぬく多金を以て金主三酬の且つ
以輝とを乃か帰者の日八田の堤を過ぎ
茶店こ小憩し一四金と投して去る

と其の高きを想ふ可し石里況有長谷川
蘇山の二所をそ雪城を識る其の意書を
を讀む此の如し云

丙午夏日其書お書時起豊後日田隈街
訪其直日景併記瞻日三首

峰峦逐影月昇時水色山光最奇他日
追思合相說通舟篝火見鷗鷺
別燭清吟賦不成水榭月夜談瑤玉半
宵試問出人耳孰與城中絲竹聲
貪着溪山未悔情吟用况後訂鷗鷺
真因一幅為相爲畫底應湖泉石聲

○水邊雲濤柏崎の響、山の北城の約を
論す。此人を推して巨匠と云ふ。其峰
の城は流るるの約を解き、而して全を成
底致し。亂記其の約を云々す。

記實

連天川雨檣孤城、殺氣如雲水外橫。半夜
山空眠不着、時聞人馬疾行聲。
昨取東方出、核岳陽山砲礮條無聲。知
他不肯寬延役、大戟長刀直碎。玉
見山半夜新、田下金鑪月裏開。問
君掃盡何物、割取數林人墮。未
八月二日夜宿杉溪家

暴卒公然夜入、門外搜獲寶貨。奪鷄豚主
人、自之。雖無語、金影如星。燭下翻
曰三日夜、解兵于梓尾山。
巨礮潭山終夜、訖身。其言云、方此
忽驚、霹靂過頭上。而伊危、楊發有
教。

○此年尾張の徳河村益根七絶の音協を
あて、今も中、とあり。而して益根の詳傳
未だ、其の事、多し。偶々尾張名家誌を閲す
其の下、是に傳あり。
河村益根、能登也、通稱倍二、其先相摸河

村人因氏為五世祖曰秀久。始仕本府。祖秀世
有二子。伯秀款。季秀根。俱精於圖書。
秀根有二子。伯殷根。有奇才而夭。仲即
此也。自幼聰敏。後入田新川學。及長
不見其人。貫事經史。又通音韻。最純算
業。凡有所學。必潛心探討。不撤不措。
似深悉宋儒。不取其說。常定順續法。若
論法式。以授生徒。寬政壬子。父歿。能書當
嗣。有故絕志仕途。養活至國子。為嗣。
文政己卯十一月十二日。歿。享年六十四。葬
于城南法輪寺。所著有帝難通論。見
辛勸通論。載於通論。四印通論。見

姓氏通論、運載、家塾、執事、集歌
集詩

○高橋義雅の世系我平多氏と云ふも
判之信を讀み、中々高橋、一旦婚の元
迄中一ののりしに、其子高橋を才於唐
并に其の所屬あり、つぎ高橋のりし、其の
記をんてある、自合と云ふ、又ぬ、高橋を
り、入しく身、一と云ふ、高橋を、一
ひ、あ、一、一、一、其の大明を、お、
云ふ

大正三年十二月十日

和國新刊の書地を承りて新築に元拙の寺に
お拓せしめしり子孫傳布方と伺いしに
子爵の流しを君の御代に承りてお拓せしめしり
言ひし事を承りてお拓せしめしり。言ひし借りの由
利子爵の御代に承りてお拓せしめしり。言ひし借りの由
東都野野の大徳寺の御代に承りてお拓せしめしり。
買寄けし。言ひし事を承りてお拓せしめしり。言ひし借りの由
の御代に承りてお拓せしめしり。言ひし借りの由
利子爵の御代に承りてお拓せしめしり。言ひし借りの由
言ひし借りの由。言ひし借りの由。言ひし借りの由。言ひし借りの由。

りといふその御代に承りてお拓せしめしり。言ひし借りの由
の御代に承りてお拓せしめしり。言ひし借りの由
その御代に承りてお拓せしめしり。言ひし借りの由
す拓る所の御代に承りてお拓せしめしり。言ひし借りの由
言ひし借りの由。言ひし借りの由。言ひし借りの由。言ひし借りの由。
つて一見しし。言ひし借りの由。言ひし借りの由。言ひし借りの由。
外にはその御代に承りてお拓せしめしり。言ひし借りの由
言ひし借りの由。言ひし借りの由。言ひし借りの由。言ひし借りの由。
由利子爵の御代に承りてお拓せしめしり。言ひし借りの由
言ひし借りの由。言ひし借りの由。言ひし借りの由。言ひし借りの由。
言ひし借りの由。言ひし借りの由。言ひし借りの由。言ひし借りの由。

まし比のむ新を祀るく之と一書分何の所
書に後築一比のむあつまひ

寸杉屋の出ま上つ比のむのむ三十二年
のむをあつまひにうむをる屋(志徳)
あを中むあつまひにうむ。其のあをを
うむ彼の三體目寸杉屋に六體目
のむ技のむのむと水産其の所一式と
祝に定て地し後成の上新比屋を後
寸杉屋と名もむ

あ寸杉屋といて更なるは
寸杉屋と三代切中(全通)指南後じ
一萬石と銘比作る可也(大徳)

寺中へ極へ江月和ある。洲山に平山藏和
の初代の位持をあつまひに。比寸杉屋
関するに。まは山科道屋の櫛に。委
く載せをわつまひに。近衛隆業殿に
三四を。同屋名に流成に成るうに。を
彼の務附の席に。あつまひ。出来てお
りまひ。和の一番介のむ。比務附の屋に
初築し比の櫛に。比屋中。三命相
の物に。あつまひ。を。比。夫に
補綴した。あつまひ。比。和
之を中其新右工門。比。比。比
比心。比。比。天下の名。比。あつまひ

十分の保命と考ふといふことししにのむらう
あり

北倉と世に中井新右衛門のむらに物しなるに
と吉文のむらし橋川金一の事歴に記しむ
左のむらし

徳皇の代の武由中よりと考ふるを心ゆに考り
多く利休や宗及らざるを以て三千石を頂
戴しとそりむらなる事ありとありりむら
あり武由の事なきと銘あり全書を
お欲するむらなる事ありと一四一城も
跡つになきを感しむらありとありとあり私
かす新倉に任んか居るに新倉のむら金の

に橋川金一の事ありとありしに北橋川金
一助と名しとそり由緒書を又見すと作
之り行盛と新倉とありとありとありとあり
りゆら事つにむら、徳田代長は行盛の勤
功を賞しと橋川、新倉一萬石の知行を
賜はるとありとありとありとありとありとあり
行盛のむらに陣中とありとありとありとありとあり
とありとありとありとありとありとありとありとあり
しとありとありとありとありとありとありとありとあり
頂戴するにありとありとありとありとありとありとありとあり
ありとありとありとありとありとありとありとありとありとあり
ありとありとありとありとありとありとありとありとありとあり

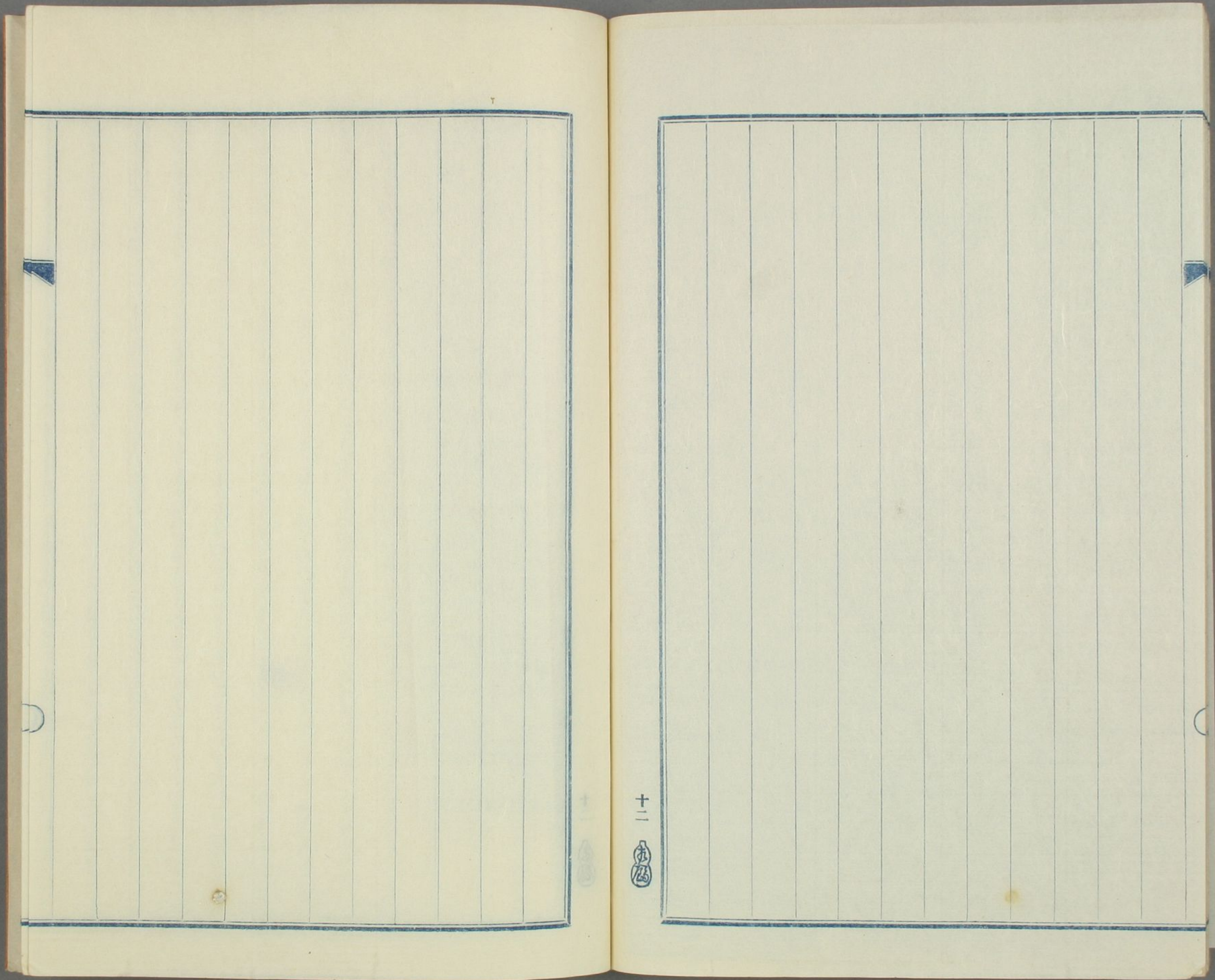
左ふ此巻を巻いとんと早達評のさかん
 とに巻を大う悦び此巻を頂戴したる上
 ころい巻の中の時りもせと頂戴し
 夫とんと拙けり巻を又使おちゆらと云
 らるは後うあつしんを一一と掃海の内行代
 りと頂戴し此巻をさす掃海と名付け
 たりといふは
 掃海といふも無人のやうあはれは日こす
 環形と胡瓶で共蓋しと擬寶珠の
 扱ふ扱ふをさす一月さうに巻をあ
 又寸柄巻もあ●●はるさ左りの終る

寸柄巻もあ

貫之の巻を終る者の中むも其の出来
 じありすは私に先年不圓寸柄巻の巻を
 年一入んすにありす寸柄巻も紙の現存
 する者を田中親美氏に托して撰言せ
 めいすうすうすうすうす寸柄巻も紙と
 主ありと貫之の撰々の巻紙又其巻
 の巻紙に自心又其巻の巻紙を一首つ
 書いんは高し本来其巻あつた巻のあ
 りかたもりすせんが竟永氏堺の南宗
 寺の僧衣を此つげもあつた巻のあ
 丸巻に巻のかたもりす巻を巻つて
 又巻をく免れをさうす巻に撰代の名

紙の裏と表をしすし比のむあめ鳥の志願
 のの手入八つにさうさうさうさうさうさうさう
 佐久野の巻の初巻に綴る寸杉屋付物
 中々此巻紙十二枚を一帖の中に入出つ
 て其巻紙の歌意に按つて古書人の扇
 面を一對として十二枚張込んにあるは
 リヤうしに、是れハ事合体なる巻の物敷
 音の出果に表ひあつてさうさうさうさうさうさうさう
 巻紙の法文に教札と帳の出来の
 名古巻の寸田手師氏の所巻さうさう
 二ありさうさうさうさうさうさうさうさう
 巻紙と稱して世上の珍巻としてさう

さうさうさうの扇面と巻紙と附席と
 さうさうの四五枚の物敷とさうさうさうさう
 さうさうの扇面と附席とさうさうさう
 和の巾着と巻紙と：捲きしと巻くさう
 一に寸杉屋付巻紙十九枚ひさす
 が其巻紙の巻くさうさうさう三四枚
 さうさうさうさうさうさうさうさう
 二二三枚と巻くさうさうさう



十二



以下全て
白紙

